

『Medical Village』の意義 ～ 新しい自分の発見 & 他人の理解が深まる ～

2023 年 11 月 12 日 第 6 回『日本メディカルヴィレッジ学会 in 山梨 ～ 山梨の文化で支えあうがんの療養 ～』（会場：WEB・山梨県立大学池田キャンパス、共催：山梨ホスピス協会 日本メディカルヴィレッジ学会/後援：山梨県 山梨県教育委員会 山梨県医師会 山梨県看護協会 山梨県介護支援専門員協会 山梨日日新聞社 山梨放送 テレビ山梨 日本ネットワークサービス/助成：在宅医療助成 勇美記念財団）に赴く。『メディカルヴィレッジ』の時代的要請を痛感する。

今回の第 6 回『日本メディカルヴィレッジ学会』は、大会長：山梨ホスピス協会 理事長 阿部文明先生（山梨県立中央病院緩和ケア科医師）により開催される運びとなった。筆者は、『日本メディカルヴィレッジ学会 理事長』として、岩間孝吉先生の座長で、講演『胆力の修養の場 ～ 新しい自分の発見 & 他人の理解が深まる ～』の機会が与えられた（画像）。

【第一部：健康長寿山梨県での取組み

第二部：地域で寄り添う療養の場 閉会后 山梨県立大学池田キャンパス会場現地参加者の皆様にトークシェアの予定】とのことである（画像）。

『日本メディカルヴィレッジ学会の概要』は【『日本 Medical Village 学会』設立の目的は、がん患者さんが 最期まで安心して暮らすことが出来る場所 (Medical Village) を地域に創ることです。 Medical Village とは、がん患者さんを癒すことのできる村です。がん患者さん本人だけでなく、本人に関わる家族や友人や、本人を支援する医療や介護の従事者にとっても 安心できる場所になることを目標にします。】（新渡戸記念中野総合病院の HP）と謳われている。

筆者の故郷は、人口約 40 名の島根県出雲市大社町鵜鷺である。隣の鷺浦地区と合わせて、『鵜鷺(うさぎ)』（小学校 & 中学校は廃校）と呼ばれている。713 年に編纂が命じられたという『出雲国風土記』にも登場する歴史ある地である。2012 年に、鵜鷺小学校の体育館で、『鵜鷺メディカル・ビレッジ構想』シンポジウムが開催されたものである。そして【東京いずもふるさと会会報『出雲』第 9 号(2015 年)の特別寄稿『鵜鷺メディカル・ビレッジ構想』】（画像）の機会が与えられたことが、今回鮮明に思い出された。『不思議な時の流れ』である。



主催 NPO法人 山梨ホスピス協会
日本メディカルヴィレッジ学会

第6回

日本メディカルヴィレッジ学会 in 山梨

～山梨の文化で支えあうがんの療養～

2023年11月12日（日）13：00～16：00

会場：WEB・山梨県立大学池田キャンパス

主催者挨拶 NPO法人 山梨ホスピス協会 理事長 阿部文明

参加費無料

第一部 13：10～14：20 健康長寿山梨県での取り組み

「山梨ホスピス協会の歩みを映像とともに」 理事 仙洞田保

「山梨の健康文化のご紹介～山梨県立中央高校探究新聞より」 理事 砂澤敦子

「がん患者さんへのアプローチ」 座長 理事 窪田恭子

・山梨県立中央病院緩和ケア病棟で終末期を支える 阿部文明さん

（山梨県立中央病院緩和ケア科医師・山梨ホスピス協会理事長）

・がん患者として地域を想う 堀内玲子さん

（山梨県がん患者サポートセンター・富士吉田市立病院内サロン/ピアサポーター）

・がん教育の実践・心に残るもの 清水美智子さん

（サンスマイルえがお代表）

第二部 14：35～15：55 地域で寄り添う療養の場 座長 監事 岩間孝吉

「身寄りがない人の医療にかかわる意思決定」

山梨大学大学院総合研究部医学域 社会医学講座教授 山縣然太郎先生

『胆力の修養の場』～新しい自分の発見&他人の理解が深まる

日本メディカルヴィレッジ学会理事長 樋野興夫先生

（順天堂大学名誉教授 新渡戸稲造記念センター長 恵泉女学園理事長）

閉会

山梨県立大学池田キャンパス会場現地参加者の皆様でトークシェア20分間予定

後援 山梨県 山梨県教育委員会 山梨県医師会 山梨県看護協会

山梨県介護支援専門員協会 山梨日日新聞社 山梨放送

テレビ山梨 株式会社日本ネットワークサービス

助成 公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

WEB参加は当日QRコードからお願いします

WEBは500名まで

ZOOM参加に関する支援は当日ございません

WEB及び会場参加とも事前の申込みは不要です



お問合せ先 NPO法人山梨ホスピス協会 山梨県甲府市青沼2-20-16

「みんなの家青沼」内 Tel：080-8450-2745 E-mail:y.hospice2023@gmail.com

NPO法人山梨ホスピス協会会員の皆様には、別途会場参加証を送付します

鶴鷺メディカル・ビレッジ 構想

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学教授

樋野 興夫

(鶴鷺小学校・鶴鷺中学校・出雲高校 卒業生)



人間は、自分では「希望のない状況」であると思ったとしても、「人生の方からは期待されている存在」であると実感する深い学びの時が与えられている。その時、その人らしいものが発動してくるであろう。「希望」は、「明日が世界の終わりでも、私は今日りんごの木を植える」行為を起こすものであろう。「自分の命より大切なものがある」ということを知ることは、「役割意識&使命感」の自覚へと導く。「練られた品性と绰々たる余裕」は「教育の真髄」である。「責務を希望の後に廻さない、愛の生みたる不屈の気性」が「人生の扇の要」の如く甦る。「ビジョン」は人知・思いを超えて進展することを痛感する日々である。

今から約 1300 年前、712 年に編纂された『古事記』に登場する、医療の原点を教えてくれる大国主命の出雲大社から、8 キロほど、峠を越えて美しい日本海に面した小さな村が、私の生まれ育った出雲市大社町鶴鷺である。隣の鷺浦地区と合わせて、鶴鷺と呼ばれている。713 年に編纂が命じられたという『出雲国風土記』にも登場する歴史ある地である。その村で、我が生涯に強い印象を与えたひとつの言葉がある。「ボーイズ・ビー・アンビシャス」(boys be ambitious) である。札幌農学校を率いたウィリアム・クラークが、その地を去るに臨んで、馬上から学生に向かって叫んだと伝えられている言葉である。もちろん、当時の私は、クラークのことも札幌農学校のことも知らず、クラーク精神が新渡戸稲造 (1862-1933)、内村鑑三 (1861-1930) という後に、私の尊敬する 2 人を生んだことも知らぬまま、ただ、鶴鷺小学校の卒業式で、来賓が言った言葉の響きに胸が染み入り、ぼっと希望が灯るような思いであったものである (鶴鷺小学校、鶴鷺中学校は既に廃校)。これが私の原点であり、そして 19 歳の時から、自らの尊敬する人物を、静かに、学んできた。その人物とは、南原繁 (1889-1974) であり、上記の新渡戸稲造・内村鑑三であり、また、矢内原忠雄 (1893-1961) である。

鶴鷺は無医村であり、幼年期、熱を出しては母に背負われて、峠のトンネルを通過して、隣の鷺浦の診療所に行った体験が、今でも脳裏に焼き付いている。私は、人生 3 歳にして医者になろうと思ったようである。医師になり、すぐ、癌研究会癌研究所の病理部に入った。そこで、また大きな出会いに遭遇したのであった。病理学者であり、当時の癌研究所所長であった菅野晴夫先生 (癌研顧問) は、南原繁が東大総長時代の東大医学部の学生であり、菅野晴夫先生から、南原繁の風貌、人となりを直接うかがうことが出来た。南原繁には、ますます深入りし、さらに、菅野晴夫先生の恩師である日本国の誇る病理学者：吉田富三 (1903-1973) との出会いに繋がった。吉田富三は日本国を代表する癌病理学者であり、菅野晴夫先生の下で、2003 年、吉田富三生誕 100 周年記念事業を行う機会が与えられた。吉田富三の論文、著作を熟読し、こ